

生活クラブ 放射能検査ニュース No. 67 2017. 4. 17発行

生活クラブ連合会

3月は887検体の放射能検査を実施しました。

3月1回～5回(2/27～4/2)の放射能検査は887検体で、そのうち831検体(93.7%)は放射性セシウム不検出でした。検出は下表の15品目・56検体でした。3月20日検査の生椎茸(丸エビ倶楽部)はセシウム合計77 Bq/kgで自主基準を超えため、供給を中止し、一部欠品、一部は他の生産者に入れ替えて供給しました。今後、原因や対応策について生産者と協議していきます。

	検査室	戸田	飯能	測定室	その他	合計
消費材検査	149	409	314	12	0	884
生産者原料	0	0	0	0	2	2
生産者製品	0	0	0	0	1	1
合計	149	409	314	12	3	887

福島第一原発事故以来の累計検査数 96,614

3月(2/27～4/2)の総ての検出結果 複数回検出は最大値を記載(単位:ベクレル/kg)

消費材名(生産者)	所在地	検出回数	セシウム134		セシウム137		セシウム合計
			検出値	検出下限	検出値	検出下限	
生椎茸(丸エビ倶楽部)	茨城県	3	9.3	<2.6	68	<2.5	77
生椎茸(JA甘楽富岡)	群馬県	5	不検出	<3.1	26	<5.6	26
生椎茸(さがえ西村山農業協同組合)	山形県	14	2.3	<2.0	22	<2.1	24
生椎茸(中伊豆椎茸部会)	静岡県	5	不検出	<3.0	18	<2.4	18
生椎茸(JAちちぶ)	埼玉県	4	不検出	<4.1	4.7	<4.2	4.7
生椎茸(クボタ商行)	福島県	1	不検出	<4.1	2.9	<2.9	2.9
舞茸(JA甘楽富岡)	群馬県	5	不検出	<3.0	8.6	<3.1	8.6
舞茸(妙義ナバファーム)	群馬県	4	不検出	<2.7	3.4	<1.3	3.4
舞茸(JA上伊那)	長野県	3	不検出	<2.8	2.0	<1.4	2.0
レンコン(農事組合法人マルツボ)	茨城県	6	不検出	<1.1	7.0	<1.1	7.0
レンコン(JA新ひたち野)	茨城県	2	不検出	<3.0	4.2	<1.5	4.2
レモン(ウイズ)	神奈川県	1	不検出	<2.7	2.9	<2.5	2.9
さつまいも(丸エビ倶楽部)	茨城県	1	不検出	1.7	2.7	0.9	2.7
さつまいも(AIC)	千葉県	1	不検出	<1.6	1.0	<0.7	1.0
もち米(もち米生産者(岩手))	岩手県	1	不検出	<0.4	1.4	<0.5	1.4

(対象核種:放射性セシウム134と137の合計 単位:ベクレル/kg)

区分	検出下限目標	基準値
すすくカタログ掲載食品(乳児用食品含)	1	不検出
飲料水	1	5
牛乳(原乳)		
米	2.5	10
鶏卵・鶏肉・豚肉・牛肉・乳製品		
青果物・魚介類・加工食品	6	25
生椎茸	10	50

食品区分	基準値
乳児用食品	50
飲料水	10
牛乳	50
一般食品	100

*生活クラブが目標とする「検出下限値」は、他団体とは異なり、セシウム134と137合計です。詳しくは生活クラブ連合会ホームページの放射能対策をご覧ください。



【5月のすすくカタログ掲載食品一覧情報】不検出確認済みの食品だけを掲載します。

- 5月1回 ミックスチーズ、あたたためてかけるだけミートソース、車麩
- 5月2回 小粒カップ納豆、ホールトマト缶、鶏肉ミンチ・バラ凍結、国産ホールトマトカット、ギリシャ産オリーブオイル
- 5月3回 おにぎり昆布、ちりめんじゃこ120g、無洗米上伊那アルプス米、
- 5月4回 ワンタン・シュウマイの皮、千葉県飯岡産釜揚げしらす、中国はるさめ、能登天然もずく(味付)
- 5月5回 国産小麦のむし焼きそば、焼そばソース

いまだに残るがれき、高い放射線量—福島第一原発を見学してきました

東京電力福島第一原子力発電所の事故から6年が経ちます。生活クラブでは、事故を風化させまいという決意とともに、原発のない社会をめざした息の長い活動を続けています。去る2月16日、日本生協連の主催で現在廃炉作業中の福島第一原発を見学する機会を得ました。その様子を報告します。(報告:樋田博/生活クラブ連合会 品質管理部部長)

■人の姿のない「帰還困難区域」を通して福島第一原発へ

まず、いわき駅からバスで、視察・見学の受け入れ拠点として使われている東京電力・旧エネルギー館に到着。説明を聞いた後、東京電力のバスに乗り換えて原発構内に向かいました。ここから先は写真撮影禁止。核物質防護の観点から、構内にある監視カメラを写真に写してはいけないなどのルールがあるからだそうです。

■困難な核燃料取り出し作業の途上にある1～3号機構内には放射線量の値が高い場所も

見学は、構内をバスに乗り込んだまま巡ります。まず、原子炉建屋の山側にある高台から、建屋を見下ろす形で見学。このときの車内の空間線量率は36μSv/hありました。1986年に爆発事故を起こしたチェルノブイリ原発4号炉を2012年に見学したときの空間線量率の最高値は16μSv/hでしたから、それよりも2倍以上の値です。

1号機は、使用済み燃料プールに392体の核燃料があり、格納容器の底には溶け落ちた核燃料(燃料デブリ)があります。現在は、これらを取り出すための調査をしたり、クレーンを作る工事を計画するなど、やっと取り出し作業の端緒についたところ。使用済み燃料プールの上部をまだがれきが覆っているのが見えました。



がれきが覆った状態の1号機建屋

2号機は、爆発事故は免れたものの、原子炉内部の核燃料は溶け落ち、もっとも多量の放射能を環境に放出した原子炉です。燃料プールには615体の核燃料が取り残されています。建屋内の空間放射線量は、1分足らずで致死量に達するほどの650Sv(シーベルト※)/hという値。あとで高台から降りてこの2号機のすぐ裏までバスで近づいたとき、バスの車内であっても120μSv(マイクロシーベルト)/hという、今回の見学でもっとも高い数値でした。(※ 1シーベルト=百万マイクロシーベルト)

4号機は、建屋の裏側まで降りて見学。現在、使用済み燃料プールにあった1,535体すべての核燃料の搬出を完了しています。

■爆発や炉心溶融はしなかったものの廃炉となる5、6号機構内では膨大な放射性のごみが増え続けている

5、6号機は構内の少し離れた場所にあるためさらにバスで移動して見学しました。地震のときに倒れた鉄塔(このために5、6号機の外部電源が喪失)も残っているのが見えました。5号機と6号機も、廃炉にすることが決まりましたが、核燃料が融解した1～3号機の核燃料デブリを取り出す方法の検討の場所として活用することになっています。

原子炉建屋1～6号機の外に、地下水バイパスの揚水井戸や、陸側凍土遮水壁、サブドレイン(建屋近傍の井戸)なども見学し、職員の説明を受けました。

構内には、放射性廃棄物を一時的に保管するための広大な施設もあります。使い捨ての放射線防護服や、汚染水処理に使ったフィルターが、放射性廃棄物のコンクリートブロックとなって積み重ねられていました。また地下水は放射能除去の処理をしても、トリチウムという放射性物質は残ってしまうので、汚染水として毎日300トンずつタンクに保管せざるをえない状況です。とてつもなく大きなタンクが並ぶ様子は異様な印象でした。



汚水保管用のタンク

■莫大な負担と無為な作業を次世代に押し付ける原発の現状を目の当たりにした見学

これからいつまでかかるともわからない廃炉作業の困難さを、目の当たりにした原発見学でした。作業には莫大な負担が伴い、凍土壁や汚染水浄化のために膨大な電力が費やされ続けます。溶け落ちた核燃料の詳しい状況もまだわからず、構内にはまだまだ放射線量が高い場所があります。今回の事故を人類への警告として受け取らずに、原子力発電を使い続けるなどという選択はあってはならないと、この見学を通じてあらためて感じました。詳しくはWebサイトをご覧ください。 →

